

女好き勇者と聖女さま

「嫌いな勇者に呪いを解くために抱かれたら、

一途な愛で離してくれませんか」

こはね

第一章 勇者と聖女と最悪の治療法

この世界には、魔王がいる。

——いや、「いた」と言ったほうが、今は正しい。

魔族を統べる魔王は絶大な力を持ち、人々を蹂躪し、ときには一つの国を滅ぼすほどの脅威だった。

魔王を討伐するため、各国の王は軍を編成し、冒険者ギルドからも腕利きの者たちが集められた。

その中でも、最も魔王討伐に近い存在として期待されていたのが、勇者シャリオルだった。

シャリオルのもとには、騎士、魔術師、弓使い、そして回復を担う聖

女であるわたしをはじめとする精鋭たちが集い、勇者パーティーが結成された。

魔王との決戦は、まさに死闘だった。

勇者が剣を振るい、仲間たちが命を懸けて道を切り開く。

戦いは熾烈を極め、勇者が押し切ろうとしていたけれど、魔王は回復役の要だったわたしに目をつけ、魔力を根こそぎ奪う忌まわしい呪いをかけてきた。

それでも勇者は魔王を討ち果たした。

世界は救われたが、強すぎる呪いは依然としてわたしの身体に残り続け、わたしの聖女としての力は失われたままだった。

人々を癒やすために生きてきたわたしは、その日から何もできない存在になってしまった。

けれど、そんな空虚な日々を送っていたある日、一つの朗報がわたしのもとへ届く。

「フェリシアさんの呪いを解く方法が分かりました」

「！　本当ですか！」

そう告げたのは、かつて勇者パーティーで共に戦った仲間の一人であり、王国随一の魔術師でもあるオーフェンだった。

彼は魔王討伐後もわたしにかけられた呪いの解析を続けてくれていた。

オーフェンは現在、王宮魔術院に所属しており、わたしもまた、現在は力を使えないものの、聖女として王宮に仕えているため、顔を合わせる機会は少なくない。

「フェリシアさんは現在、呪いによって魔力回路を遮断されている状態です。魔力を生み出せなくなったのではなく、生み出した魔力を外へ流せない状態なのです。この魔力回路を再度開くためには、外部から膨大な力の聖属性の魔力を流し込み、閉ざされた魔力回路を強制的に開く必要があります」

「聖属性の魔力、ですか」

聖属性は極めて希少な属性だ。

本来その力を扱えるのは聖女だけ。聖女が聖女といわれる所以でもあ

る。

けれど現在、この国の聖女は力を失ったわたし一人しかない。

そして、もう一人だけ。

例外的に聖属性を扱える存在がいた。

「つまり、勇者シャリオルから聖属性の魔力をもらう必要があるということですね」

「ええ、その通りです」

「それなら、聖属性の魔力をもらうためにどんな儀式をすれば良いのでしょうか？」

一刻も早く聖女としての力を取り戻したい。そんな思いから、逸る気持ちを抑えながら尋ねると、オーフェンは珍しく言いづらそうに視線を

泳がせた。

「魔力回路を完全に開くためには、魔力を最も近い距離で受け取る必要があります」

「最も近い距離？」

「つまり……」

オーフェンは小さく咳払いをしてから告げた。

「勇者シャリオルと肉体を重ね、聖属性の魔力を体内へ受け入れていた
だく必要があります」

「………は？」

言われた意味をうまく理解できず、思考が真っ白になる。

「そ、それって……」

「ええ。性行為です」

あまりにも予想外の答えに、わたしは思わず固まってしまふ。

「な、な……何を言っているんですか!？」

思わず声が裏返る。

そんな馬鹿なことがある？

呆然としたままオーフェンの顔を見つめると、彼は真面目な表情で頷いた。

「聖女としての力を取り戻すことは、国家にとって最重要事項でもありますから。国王もまた、一日も早く聖女の力が戻ることを望んでおられます」

「そんな……」

信じられない。呪いを解くためとはいえ、よりにもよって、あの勇者と肌を重ねなければならぬなんて。

オーフェンは静かに一礼した。

「呪いを解くために、どうか頑張ってください」

それだけ言い残し颯爽と去るオーフェンに、わたしは呆然と立ち尽くすしかなかった。

——わたしが、勇者シャリオルと、肌を重ねる？

（そんなの、ごめんだわ）

勇者シャリオルは、魔王を討ち果たした英雄だ。

誰もが認める圧倒的な実力を持ち、その端正な容姿も相まって、王都中の国民、特に女性たちからは絶大な人気を誇っている。

——ただし、彼にはひとつだけ、致命的ともいえる欠点があった。

それは筋金入りの女好きだということ。

彼が女好きだということは自他ともに認められている。

旅先の宿では看板娘を口説き、一夜を共にしたという噂は枚挙にいとまがない。王都へ戻ってから、美しい女性を見かければ甘い言葉を囁き、誰にでも気さくに距離を縮めてしまう。

そんな軽薄な男性を、わたしはどうしても好きになれなかった。もちろん、勇者パーティーの仲間として戦っている間は、私情を挟むことはなかった。けれど内心では、彼の女性関係についてだけは最後まで理解できなかったのである。

「あれ、フェリシア。こんなところでどうしたの？」

悶々としていると、突如かけられた言葉にびくりと肩が跳ねる。

この軽薄そうな声は、まさに今、頭の中で考えていた人物の声だった。

ぎぎぎ、という音がしそうなほどぎこちなく振り返ると、金髪にアイスブルーの瞳を持つ青年と目が合った。

勇者、シャリオル。

苦手ではあるけれど、整った顔立ちに一瞬目を奪われる。この男、本当に見た目だけは良いのだ。見た目だけは。

「シャ、シャリオル。ええつと……オーフェンからわたしの呪いについて話を聞いていたの」

「本当？ 何か解決方法は見つかった？」

「ええ、教えてもらった、けど……」

「けど？」

言えるわけがない。あなたと性行為をすることが呪いを解く方法だ——
だなんて。

顔を真っ赤にして口ごもるわたしを、不思議そうな顔で見るシャリオ
ル。

「これから、どうするか考えるつもりよ」

「解決方法が分かったのに、ためらうことが？」

怪訝そうに首を傾げるシャリオルに、うつ、と言葉が詰まる。

「と、ところで！ シャリオルはどうして王宮にいるの？」

これ以上この話を続けてはならないと、強引に話題を変える。

「ああ、国王に呼ばれてるんだ。何か話があるみたいで」

「そうなのね。それなら急いだ方がいいわ。王様を待たせるわけにはいかないもの。さあ、早く」

「う、うん？」

どこか腑に落ちない様子のシャリオルを王のいる謁見の間へ急がせて、わたしは踵を返した。

（シャリオルと性行為だなんて、絶対に嫌。別の方法がないか、調べないと……）

そんな風に考えながら、わずかな希望にすぎるように王宮の書庫へと足を向けた。

聖女は王国に仕え、治癒魔術で兵士たちを癒し、人々を救う存在だ。

その他にも、国の安寧を願って祈りを捧げ、災厄を遠ざけることも聖女の大切な務めだった。

けれど、それらはすべて聖女の力があってこそそのもの。

魔王の呪いによって魔力回路を閉ざされ、聖女の力を使えなくなった今のわたしには、何ひとつ果たせない。

それでも王宮に居場所が残されているのは、ただ「聖女」という存在を国民に示すため。聖女がいるという事実だけで、人々は安心する。

そのために一室を与えられ、わたしは今も聖女として王宮で暮らし続けていた。

……もつとも、その実態は、お飾りに過ぎないのだけれど。

力を失ったわたしにできる仕事はなく、毎日を持て余すばかりだった。

（でも、今は落ち込んでいる場合じゃない）

力を取り戻す方法が見つかった以上、まずは情報を集めなければ。

書庫にたどり着いたわたしは、聖属性の魔力について書かれていそうな本を片っ端から探す。

『魔術大全』、『聖なる生き物』、『歴代聖女の記録』……うーん」

ぱらぱらと頁をめくり、流し読みをしながら目を走らせる。

そのとき、一冊の古びた魔術書の一節に目が留まった。

『聖属性の魔力は、浄化と治癒の性質を持つ。呪いや穢れに侵された者

へ流し込むことで、それを打ち消し、浄化する力を発揮する。』

「……やっぱり、聖属性の魔力自体は呪いに効くのね」

さらに頁をめくる。

『魔力は身体的接触によって伝達効率が大きく上昇する。特に生命力を伴う深い接触ほど、魔力は混じり合いやすい。』

思わず本を閉じる。

「……オーフェンの言っていたことは、本当だったんだ」

身体的接触が必要なのは間違いないらしい。

「聖属性の魔力を使えるのは今のところ聖女と勇者だけ……。なら、他

国の聖女を頼るのはどうかしら……？」

とにかくシャリオルと交わるということだけはわたしの中では論外だ

った。

絶対阻止しなければ。

窓から覗く空は、いつの間にか夕焼け色に染まり始めていた。

わたしは書籍を元の棚へ戻すと、小さく息をついて自室へと戻るのだ
った。

夕食を終え、あとは寝るだけとベッドの上で本を読みながらのんびり
していると、不意にこんこん、と扉を叩く音が響いた。

侍女が何か用事だろうか、と怪訝な気持ちで扉を開けに行く。

「フェリシア、こんばんは」

そこに立っていたのは、侍女ではなく、金髪アイスブルーの瞳の青年――

—シャリオルだった。

「……………どうしたの？」

こんな夜の時間に女性の部屋を訪れるなんて、不躰にもほどがある。
わたしは胡乱な目を彼に向けた。

「ちよっと、話がしたくて」

「……………」

明日じゃ駄目なのかと口を開きかけたが、シャリオルは「失礼するよ」と言いながらさっさとわたしの部屋に入り、ソファに座った。

「今日国王に会って勅命が出てね。君の呪いを解いて欲しいと言われた」

「え……………」

「詳しいことはオーフェンにも聞いた。魔力回路を開くためには、僕と性行為するのが一番なんだってね」

「な、な……」

なんてことを教えてくれているのだ、国王とオーフェン。

シャリオルは遊び人の彼らしからぬ真剣な目をわたしに向ける。

「フェリシアには何度も助けられてきた。僕は君の呪いを解くためなら全面的に協力するよ」

その真っ直ぐな言葉に、わたしは言葉を詰まらせた。

シャリオルは本気で言ってくれているのだろう。けれど、だからといって、女遊びの激しい彼と肌を重ねるなんて、どうしても受け入れられない。

「……そのことなんだけど、他国の聖女を頼ろうと思ってるの」

「他の聖女を頼るってことは、他国へ助けを求めるのと同じだよ。自国に聖属性の魔力を扱える勇者がいるのに、それを差し置いて援助を求めるとなると……たぶん、国王は認めない」

「……」

全くもって、その通りだった。

「でも……でも、わたし、シャリオルとだなんて……」

「これは国王の勅命でもある。実質僕たちに拒否する余地はない」

「……」

アイスブルーの瞳に静かに見つめられながら、わたしは唇を噛む。

「優しくするよ？」

ずっと手を差し伸べられるけれど、わたしは足を動かさない。

「ま、待って」

わたしは一步、後ずさった。

「どうしても、今じやなきや駄目？」

「君も聖女の力を失って困っているだろう。それに国王も一刻も早く呪いを解くことを望んでいる」

「でも……」

自分でも情けないと思うほど声が震えていた。

「わたしは、愛のない行為なんて嫌なの」

「僕は女性のことは大切にするよ」

不思議そうな顔でそう返され、わたしはそういうことじゃないと思

う。

彼はきっと、一人の女性を愛したことなんてないのだろう。だからわたしは言っている『愛』が伝わらないのだ。

微動だにしないわたしを見かねたのか、シャリオルがゆつくりと立ち上がる。

「フェリシア」

優しく手首を捕まれ、そのまま軽く引き寄せられる。

「きゃっ……！」

抵抗する間もなく、そのまま二人で柔らかなソファへと沈み込んだ。

ふわりと石鹸の優しい香りが鼻腔をくすぐる。肌が触れ合うその距離に、心臓がどくん、と大きく跳ねた。

「君がどうしても嫌だったら、そのときは途中でやめよう」

わたしの体を抱きとめたシャリオルは、体を密着させながら囁く。

——絶対にしたくない、と思っていた。

けれどこれは王の勅命でもある。

わたしは呪いを解いて、聖女としての力を取り戻さなければならなくて。

頭の中であれやこれやと考えても、結局、これはやらなければいけないことなのだ、という諦めともいえる結論がわたしの頭の中を占め始めていた。

骨ばった指がわたしの頬をすりと撫でた。指先がふに、と唇をなぞる。

「……っ」

男性にこんなふうに触れるのは初めてだった。

くすぐったくて、熱くて、身体がびくりと震える。

「大丈夫、怖いことはしない。優しくするから」

「くくくっ、今まで、シャリオルは、わたしに手を出したことなんて、なかったのに」

「フェリシアは僕のこと嫌ってたでしょ。嫌がる相手と無理やりする趣味はないから。今回は君を助けるために、特別」

シャリオルにも彼なりの主義があるらしいということに驚く。わたしの態度を見て、彼も一線を引いてくれていたのだということに初めて気が付く。

整った顔が近づき、わたしの上に影が落ちる。

柔らかな感触が唇に触れ、ちゅ、と小さな音を立てて離れた。

わたしが動けずにいると、角度を変えて何度もちゅ、ちゅ、と優しく唇を啄まれる。

「……っ、この作業は必要なの？」

「作業って、君ねえ」

シャリオルは眉を下げて困ったように笑う。

「こういうのは雰囲気も大事なんだよ」

くい、と顎を持ち上げられ、再び唇が塞がれる。

今度はぬるりとした温かな感触が唇をなぞり、思わず身体がびくりと震えた。

「ちよっ……、んっ」

ざらりとした熱い舌が、わたしの舌にゆっくりと絡みつく。ちゅうつと甘く吸われるたび、身体の奥がぞくりと震えた。

口の中をなぞるように舌が這い、翻弄される。

くちゅくちゅと卑猥な音をたてながら、隅々まで丁寧に味わわれている。

「んっ、ふ、あ……」

こんな感覚、知らない。

息をするのも忘れて舌を吸い舐めとられ、わたしは息継ぎをするようにシャリオルの唇から逃れる。

ようやく舌が離れると、絡み合った唾液が舌の間でつうつと糸を引い

ていた。

「フェリシアの舌は、甘くておいしいね」

「なに……、んっ」

ようやく解放されたと思ったのも束の間、再びシャリオルの唇が重なる。

しっかりと塞がれた唇の間から、ぐちゅりとまた舌が侵入してくる。

くちゅ、ぢゅっ、ちゅる♡

「ん、はあっ……、んん……」

濡れた水音が絶え間なく耳元で響き、思考がじわじわと蕩けていく。

顎を支えていた手がゆっくりと首筋をなぞり、そのまま胸元へと滑り落ちる。柔らかな膨らみを包みこむようにそつと撫でられ、指先が優し

く形を確かめるように動いた。

「やっ……、んっ」

今わたしが身につけているのは眠るための薄い夜着だ。普段着よりも薄く柔らかな生地は、外から伝わる手の温もりも、指先の動きも、そのまま肌へと伝えてしまう。

「ここを触られるのは初めて？」

くすり、とシャリオルが微笑む。

「聖女様は、普段、自分で慰めたりはするのかな」

「そんなこと、するわけ……」

「自慰もしたことないの？」

少し驚いたシャリオルの顔。

両胸をやわやわと揉みほぐされるたび、柔らかな肉が指の間で形を変え、くすぐったいような、落ち着かないような感覚が広がっていく。

「んん……」

くるくると胸の先端の周りを指先で優しくなぞられる。感じたことのないぴりぴりとした甘い痺れが胸から伝わり、ぴく、ぴく、と反応してしまう。

（なに、これ……）

その甘い痺れは胸から全身へと伝わり、頭の中までぼうつとするようだった。

「ちよっと触っただけなのに、もう感じちゃってるの？」

「ち、ちが、……ひゃうっ!？」

否定しようとする、ぴんっ♡と先端を軽く弾かれ、甘い痺れが一気に駆け抜けた。

そしてまた、すりすり……♡と乳嘴の周りを優しく撫でて、ぴんっ♡と弾く。

「うっ、んん♡」

「服の上からなのに、こんなに感じて……。直接触ったら、どうなっちゃうんだろうね？」

悪戯っぽく微笑むと、シャリオルは夜着の胸元から手を差し入れた。ごつごつとした大きな男の人の手が、初めて肌へ直接触れる。

ゆっくりとした動作で、すり、すり……。♡と先端の周りを円を描くようになぞられ、その甘い痺れに震える。そして、ツンと立ち上がって主

張している先端を、シャリオルは指先できゅうつ♡と摘まみ上げた。

「ひアっ……♡」

「フェリシアの乳首、もうこんなにビンビンになって、可愛い。敏感なんだね」

耳元で甘く囁かれながら、側面を爪先で軽く弾かれ、「あっ、あっ」と嬌声が漏れる。

「しこしこしてあげるね。ほら、しこ……しこ……しこ……♡」
囁きとともに粒を摘まれ、擦られる。

「んん♡ や、やめて……」

「そんな可愛い声出してるのに？ やめてほしくないでしょ？」
からかうように微笑んだシャリオルは、手を止めることなく、指先を

動かし続ける。

しこ……しこ……♡

「あっ、んう……♡」

嫌だと言葉では拒もうとしているのに、身体はその刺激を受け入れてしまっていた。

シャリオルはもう片方の手で夜着の前ボタンを一つ、また一つと外していく。ゆつくりと胸元が開き、薄い布が肩から滑り落ちると、隠されていた白い肌が露わになった。ふるりと柔らかな膨らみがこぼれる。

「やっ……」

思わず胸元を隠そうと手を伸ばすと、その手をシャリオルがそつと包み込む。

「だめ。隠さないで」

優しく囁かれ、動きを止められる。羞恥でわたしの顔はきつと真っ赤になっているだろう。

夜着の下に隠されていた膨らみも、前戯でツンと立ち上がった桃色の頂も、今では彼の視線の前にさらされていた。

恥ずかしさでどうにかなりそうなのに、シャリオルは熱を帯びた眼差しを向けるばかりで、厭らしく笑うことも、からかうこともなかった。

「……綺麗だ」

次の瞬間、彼は身をかがめ、あろうことかその頂にちゅうつと吸い付いた。

「ふぁっ……！」

ちゅぱ、くちゅ、ちゅうつ♡

舌先で吸い付かれ、転がされ、弾かれる。

指とは違うぬるりとした感触に、快感が押し上げられる。

「ひゃっ、うんん♡ あっ♡」

出したことのない甘ったるい声が自然と口をついて出てくる。

シャリオルはわたしの首筋に吸い付き、首を伝って舐め上げ、そしてわたしの口を塞ぐ。

「んっ、あっ……♡」

くちゅ、ちゅぷっ、ちゅる……、ちゅうつ♡

舌先がわたしの口内を蹂躪し、胸の先端はくりゆくりゅ♡指でこねくり回されて、わたしはなすすべもなく翻弄されているばかりだった。

「フェリシア、可愛い……」

「な、……」

この男は、本当に恥ずかしげもなくそんな言葉を口にする。

「下も、気持ちよくしていい？」

「えっ……」

シャリオルはわたしをソファにもたれかからせ、足をぐいと持ち上げ、
げて開く。

「や、シャリオル、やめて……っ」

「やめてほしいの？ フェリシアのここは、とても喜んでいるみたいだ
けど」

ちゅ、ちゅつと、太ももの際に口づけを落としながら、薄い下着一枚

に隔たられた秘所をするりと撫でられる。

「んん、んあっ♡」

ぐちゅり、と卑猥な水音が立つのが聞こえる。

わたしは半ばパニックになりながらふるふると首を振る。

「やだあ、汚い……！」

「汚くないよ。おまんこいっぱい気持ちよくなって、濡れちゃったんだね」

下着越しにちゅうつと秘所に吸い付かれ、びくんと腰を震わせる。

「あっ!? や、だめ、だめえ！」

ぐちゅ、ぐちゅっ、ぢゅるるっ♡

シャリオルの舌が上下に動き、下着がさらに湿り気を帯びる。愛液を

舐め取るように、シャリオルは布越しに秘所を吸い上げた。

「んんっ、あ、やあァっ♡」

舌がぬるりとさらに敏感な箇所を掠める。感じたことのない痺れが奔り、数段上擦った声が出る。勝手に腰がびくりと震えた。

ぬりゅ♡　ぬるっぬるっ♡　ちゅううっ♡

その衝撃が走った箇所を、シャリオルに執拗に舐められ、吸い上げられる。

舌の動きで下着が同時に擦れて、言いようの無い快感に背中を反らせる。

「うァっ♡　んんっ♡　や、だめ、あっ♡」

「は……、フェリシアはクリトリスが好きなのかな？　顔も蕩けちゃっ

て、可愛い」

いつの間にかシャリオルに下着は取り払われ、秘裂がシャリオルの前にさらされていた。

「やっ、あっ！」

脚を大きく開かれたまま支えられ、逃げることもできない。直接舌がぴとりと合わさった瞬間、腰が大きく震えた。

ぐちゅ、じゅぷ、じゅぷ♡

「あぁっ！ んぁぁぁっ♡」

先ほどまで布越しに感じていた刺激とは比べ物にならないほど、鮮烈な感覚が全身を駆け巡り、背中が意識とは関係なく反ってしまう。

シャリオルの舌が敏感な突起を押し潰し、くりゅくりゅくりゅ♡と舌

先で転がされる。

「ひゃっ、ああああ、やああッ♡」

跳ねる体を押さえつけられ、舌で突起を絡め取り、ぢゅうっ♡と吸い上げられる。

ざらりとした舌の表面がしこしこ♡上下に舐め上げ、その感触に上擦った嬌声が漏れる。下腹部から熱が込み上げ、身体がふわりと浮かぶような感覚がやってきて、どこかへ昇っていくような感じがする。

「や、それ、だめ、っ、変に、なっちゃうっ」

わたしはやめてほしくてそう言ったのに、シャリオルはなぜかさらに執拗に舐め、快感を与える刺激をやめない。

敏感な突起全体を口に含み、舌を上下に激しく擦りながらちゅこちゅ